「食卓テーブルと息子」

ペンネーム　栗山文月

我が家の食卓テーブルと息子は、時々私に「それって思い込みじゃないの」と問うてくる。

◆◆◆

我が家のダイニングテーブルは、ボーリング場からやってきた。

七年前、夫の実家の近くにあったボーリング場が閉鎖し、解体が始まったと聞いた時、「ちょっと様子を見に行ってくる」と、ある日夫は軽トラに乗って出かけて行った。そして何故か、軽トラの荷台よりも相当大きな木材の塊を積んで、ハイテンションで帰ってきた。帰ってくるなり「運ぶから手伝って」という。

その木材の塊は、厚みは五～六センチ、幅は大人が両手を伸ばしたくらい、長さはゆうに三メートルを超えている…どう見積もっても相当な重さに違いない。板の表面はコーティングされていた形跡があるものの、木と木の継ぎ目に隙間があって凸凹、傷も無数にある。一体、何に使われていたのだろうか。「ボーリング場のレーンの一部だよ」と夫。聞けば、業者さんが分けてくれたらしい。

そして彼は「これ、この家の食卓テーブルになるから」と、満面の笑みで言った。はあ？ボーリング場のレーンが食卓テーブルに？「そうだよ」。ガタガタなのにテーブルになるの？「気になるなら何か敷いたらいいじゃん」。そういう話じゃなくってさ、そもそも人が踏んでいた床をテーブルに使うなんて常識的に考えてもあり得ないでしょ！と言うと、「どうして？キレイに磨けばいいだけじゃない」と夫。

思わぬ頂き物に感謝し、嬉しさにはしゃぐ夫と、その感覚が全く理解できない私。何をどう話しても着地点はみつからない。長年床だったものをテーブルに

ペンネーム　**栗山文月**さん

農家ではないけれど、農村地区に夫と息子２人、犬１匹とともに暮らす。

夫は大工。

600坪の畑は義父母が管理。ときどき、苗や野菜をご近所さんからおすそ分けいただく。

水路の掃除や集落の草刈りにも参加し、農村での暮らしを楽しむアラフォー母さん。

するなんて。ミソもクソも一緒にするなっておばあちゃんに怒られそうだ…。でも、もう夫の「これ、すごくいいテーブルになるよ」という言葉を信じるしかない。私は仕方なく目の前の板を何度も何度も磨いた。数十年、ボーリング場のレーンとして活躍し、その役目を終えた木材が、我が家の食卓テーブルとしてふたたび息を吹き返した。

◆　◆　◆

この食卓テーブルは現在、食卓兼仕事机兼作業場など、いろんな要素を兼ね備えている。玄関から入ってすぐにこのテーブルが置いてあるので、来客はまずこのテーブルの大きさに驚く。そこでこのテーブルができるまでのいきさつを話すと、みな面白がってくれる。初対面の人でも話題に事欠くことはない。このテーブルが居間にあるだけで話題を提供し、笑顔が増えるのだ。こんなテーブルはそうない。昔は頭が固かったなぁと懐かしく振り返りつつ、今はその存在感の大きさに期待している。

◆　◆　◆

テーブル天板

次はちょっと前の次男の話。彼が保育園に通っていたころ、たびたび右と左の靴下が揃っていなかった。保育園の先生にも「靴下って左右同じだと思っているので、片方が見当たらないとき、探すのが大変なんですよ」と苦笑いされた。

洗濯をし、タンスにしまうときには必ず両足そろえているので、左右違う種類の靴下を履く原因が見当たらない。いたずら好きの彼のこと、わざと違う靴下を片方ずつ履いているのではないだろうか…。保育園の先生に指摘された翌日、彼に「どうして左右別の靴下を履いて行ったの？」と聞いた。「右足だけ濡れちゃったのさ。だから」。「だったら両足とも替えたらいいじゃない？」「どうして濡れていないほうも替えなくちゃいけないの？」「だって、揃っていないと変でしょ？」「変じゃないよ。それに濡れてもいないし、汚れてもいないのに替えるほうがヘンでしょ」「揃っていないほうが変だよ」「僕が変じゃないって言ってるからいいの。それにママのことじゃないから関係ないでしょ？」と。

衝撃だった。私は、靴下は両足揃えて履くもの、片方ずつ履くのはヘンで恥ずかしいことという「私の常識」を彼に納得させるのではなく、押し付けていたのだ。今までそれが当たり前だと思っていたから、彼からこんな返答が来るとは予想もしていなかった。

結局、保育園の先生が靴下を探すときに大変だからそろえて履いて欲しいと話すと息子は「わかった」と納得してくれて、それ以来、あまり左右違う靴下を履かなくなった。

◆　◆　◆

小学校に入ってからは、時々ジャージの上下を揃えずに着ていることが気になっていた。上は黒のアディダス・下はグレーと赤のアシックス、ある日は真っ赤のブーマの上着に紺でオレンジの線のアディダス…。どう考えても組み合わせを考えているとは思えない。低学年時は仕方がないとしても、もう高学年なのに人の目とか気にならないのだろうか。それとも彼なりのおしゃれなのだろうか。最近ますますバラバラの組み合わせが頻回に登場するようになっていた。

ある日、「どうしてジャージの上下を揃えて着ないの？揃えたほうがいいと思うな」と言うと、「別にいいじゃん」とそっけない返事の次男。思わず「お母さん、上下バラバラは嫌だから着替えてよ」「え～、いやだよ」「本当に格好悪いし、嫌なのよ」「もう、仕方ないな」とその日はしぶしぶ着替えて登校した。

翌日また上下揃っていなかった。私は「今日も揃ってないよ！ヘンだから着替

えて」「いいの、これで」「揃っているのあるでしょ？」「いやだ、着替えない」と今回彼は着替えようとしない。

イライラする私に、夫は「何でそんなに揃っていないのが嫌なの？貴女がその組み合わせは好きじゃないと言うのはいいけれど、着替えさせるのはどうなんだろうね？」と言ってきた。次男も「ママ、関係ないのにしつこい」。

ハッとした。ジャージの上下が揃っていようがいまいが、彼はそのことをヘンだともかっこ悪いとも、気にも留めていないのだ。それなのに、私は毎日執拗に「ヘンだ」と言い、着替えさせようとしたのは、以前にあるお母さんから「次男君はジャージ、上下別々に買っているの？」と聞かれたことを気にしていること、また、私の中ではあり得ない組み合わせだったから。「ジャージの上下を揃えて着ること」は一般常識で、客観的に物事を判断しているつもりだった。

でも、今回も数年前の靴下の時と同じ、私の当たり前を息子に無理やり押し付けていただけだったかもしれない。

◆ ◆ ◆

「私の常識」は無意識の思い込みでもある。家族や友人知人とのやり取り、本や新聞、テレビやインターネットからの情報…毎日の生活の中でじぜんと「常識」は作られていく。その常識のほとんどは無意識だからこそ、時に人を傷つけ、その人の感性や個性を奪うきっかけになるかもしれない。成長途中の子どもならなおさらだ。

聞けば、夫は今の家に住むことを決め、リノベーションしているころからずっと大きな食卓テーブルを探していたようだ。縁があってボーリング場のレーンを頂いたとき、大きくて丈夫で素敵なテーブルになるに違いないと大喜びで帰ってきたのに、私はずっとしかめっ面だったから、とても悲しかったと言われた。

次男は保育園のころから自分で考えて行動している。聞けば、靴下が左右違っても、ジャージが上下あべこべでも特に困っていないし気にもしていない。私一人でワーワー言っていたのだ。二人とも、本当にごめんなさい。

◆ ◆ ◆

人との違いを否定するのではなく、素直に受け入れ、変化を楽しむ余裕がある人間になりたい。無意識にやっているからこそ、意識することは容易ではない。でも「これって私だけの常識かも」「偏見かも」という自覚をもって毎日生活していけば、ほんの少しでも押し付けることを回避することができるかもしれない。

食卓テーブルができるまでのいきさつ

と、次男とのやり取りは自分の中にある思い込みを意識させ、これからそれとどう付き合っていくのかを問われている気がした。年々加齢のせいもあってか、無意識の思い込みが激しくなってきた中で、よっぽど意識しないと「私の勝手な思い込み」を夫や息子たちに押し付けてしまい兼ねない。そうならないためにも、これからも人との違いや変化に敏感に反応して面白がったり、全国、世界中旅をしたりしながら、何歳になっても、人の話を素直に聞けるようになりたいな。

◆◆◆

食卓テーブルでコーヒーを飲んでいると、正面で宿題を終えた息子が折り紙を折っていた。卓上は凸凹だけど、何も敷かず鼻歌を歌いながら折り紙を折っている。変わらなくてはいけないのは私だなぁと、食卓テーブルと息子が教えてくれた。

▲パーティ

▲セミナー

▶作業